総幼研を紹介します！

当園が所属する一般社団法人　総合幼児教育研究会（略称：総幼研）とは、新しい教育理念に基づいて保育活動を実践する、全国の幼稚園・保育園・こども園による自主的な研究組織です。これまで数々の教育事業に取り組み、真に有意義な幼児教育としての「総幼研教育」の実践・深化、またその普及に努めてきました。各会員園が互いに切磋琢磨して、ともに高い教育実践に向け、日々の努力を重ねています。主な活動として、多様な研修会や保護者の皆様に対する啓もう活動、また教材の出版や企画も行っています。

「総幼研教育」ってどんなもの？

「総幼研教育」の特徴としてよくいわれる具体的な活動としては、「体育ローテーション」や「カードあそび」「暗唱、音読・素読」「プリントあそび」などがあります。また多くの園では「合唱・合奏」などの音楽活動も盛んです。もちろん、園独自の理念や地域性に基づいた活動も多種多様に行なっています。それら全てが、「動きとことばとリズム」を基軸とした活動であることがポイントなのです。

目の前の成果ではなく「根っこ」の力

「とび箱が十段跳べる」「むずかしい漢字が読める」「計算ができる」「むずかしい曲が歌える・演奏できる」という成果が注目されがちですが、これらは決して目的ではありません。活動をみんなで一緒にすすめていくことで、人間としての土台となる「深広の根っこの力＝生きる力」をはぐくむこと。それこそが「総幼研教育」の目的なのです。

実践から生まれた理念だからこそ

さらに特筆しておきたいのは、その理念から各々の教材にいたるまで、全ては長年の実践から生まれたものであるという点です。本会会員園で展開してきた数十年来の実践から生まれた確かな理念であるからこそ、全国的な広がりを持ち、多くの皆様から支持されています。

育つときに、大きく育てたい。

総幼研とは人間の深広の根っこをはぐくむ教育。
生きる力をはぐくむ、感性と創造の教育です。
子どもは自ら学びたがる存在。
伸びるときはいま！
知的創造教育をぜひ！

入園ガイド

一般社団法人　総合幼児教育研究会　会員園

総幼研3つの柱＋1

1 脳科学と総幼研教育

総幼研の教育は、子どもの脳発達の原理に基づいています。それは、0歳からはじまる環境の教育です。全ての子どもは140億という膨大な数の脳細胞をもって生まれてきます。ただし、生まれたままの脳細胞の一つひとつは、いわゆる「種」のようなもので、環境が整わず、うまくはたらかないと、「芽」や「根」が出ないのです。

つまり種は、無限の可能性をもっていますが、適切な時期に、適切なはたらきかけがないと、根も張らないし、芽もでない。そればかりか時期を逃がすともはや種そのものの可能性さえ潰してしまうことになるのです。

人間の機能をはたらかせることが可能な幼児期に「知・情・体」の調和のとれた教育環境を整え「動きとことばとリズム」を基調とした最も適切な経験を与え、活発な活動をくり返し展開して、子どもたちの豊かな人間形成の基礎基盤を構築する教育、それが総合幼児教育です。

幼児教育「危機の時代」

危機1 スクリーンタイムの長時間化による体力低下

子どもたちのスクリーンタイム（テレビやスマホのスクリーンに釘付け状態のこと）の長時間化と、体力低下の因果関係は色々なところで指摘されてきました。コロナや猛暑等の影響もあり、子どもの身体は屋内に留まることが多くなり、結果、肥満児は増え、うつ症状にも影響があるのかもしれません。さらに重大な問題は、これが体力のみならず、子どもの知的な発達そのものに大きな影響を及ぼしかねないという点です。

危機2 コミュニケーション能力の低下

いまの子どもたちがコミュニケーションを苦手とするのは、訳があります。子どもをめぐる環境の変化に起因しています。まず少子化の影響です。コミュニケーションするにも相手がいなければ、その経験は少なくなります。昔に比べ家族単位が小さくなった上に子どもも塾やお稽古ごとで忙しく、近所でいっしょになって遊ぶ友だちも少ないのが実情です。またITの発達で家庭自体がPCやスマホ漬けになり、家族間での会話がめっきり少なくなっています。そのうち自分から発話することがなくなって、コミュニケーションはすべてアプリで済ます、といった社会が出現するのかもしれません。

危機3 スマホによる学力低下

スマホと学力の関係について、日本では東北大学川島隆太先生の『スマホが学力を破壊する』（集英社新書）が、その現実を膨大なデータから実証されました。「スマホを4時間以上触っていると2時間の学習効果が消える」「スマホを持つようになった生徒は成績が下がる」「スマホを使わなくなると成績が急回復する」「スマホの長時間使用は脳発達に悪影響を与えている可能性がある」等々、7万人の子どもを対象に数年間にわたって行った大規模調査の結果、これらの可能性が明らかになりました。

だからこそ！ 総幼研の日課活動

総幼研の日課活動は、朝一番に身体を目いっぱい使った体育ローテーションからはじまり、クラス一体で「共振」することばの活動、そして声と身体と心を震わす音楽活動と、子どものあたまとこころとからだの持つ可能性を最大限引き出す活動です。

2 「知・情・体」バランスのとれた人格の育成 ～10の姿をはぐくむ～

「知・情・体」いいかえれば子どもの「あたま・こころ・からだ」です。人間として大事なこれらの基礎基本は、幼児期の生活体験の中ではぐくまれます。どれかに偏ることなく、バランスよくあたまとこころとからだをはぐくみます。

「幼児期に育ってほしい10の姿」の活動指針は、全て総幼研の活動の中に含まれています。輝く子どもの個性も、放っておいて育つわけではありません。豊かな感性や情操も、人間の確かな基礎基本がはぐくまれてこそ、その上に花開くものです。効率よく成果を求めるのではなく、生活の中で自然に吸収されてゆく経験と、着実に身につくくり返しのたしかさ。総幼研とは人間の深広の根っこをはぐくむ教育。生きる力をはぐくむ、感性と創造の教育なのです。

MESSAGE FROM

近年の多くの脳発達研究から、脳の発達に即した経験を与えることの有用性や、脳の発達に重要な生活習慣が明らかになっています。その中でも、運動、音楽、会話などは脳の発達に有用であることが示されています。これらを基調として、子どもたちに豊かな経験を与えることは、脳が変化する力、つまり脳の可塑性を高め、様々な能力を獲得していく上でもたいへん有用です。

瀧 靖之 東北大学加齢医学研究所教授

医師。医学博士。東北大学加齢医学研究所および東北大学スマート・エイジング学際重点研究センターなどで大規模脳画像データベースを用い、脳の発達・加齢を明らかにし、どのような生活習慣が脳の加齢を抑えるかを明らかにしてきた。脳の発達から加齢までのトピックを網羅した研究分野の第一人者。

著書 「脳医学の先生、頭が良くなる科学的な方法を教えてください」（日経ＢＰ）
「『賢い子』に育てる究極のコツ」（文響社）／「こどもの頭がよくなるルールブック」（ダイヤモンド社）

3 「動きとことばとリズム」に基づく環境設定

動き

朝いちばんからいきいきと躍動する子どもたちの「動き」は、一つひとつきびきびとしてとても気持ちよく見えます。小さな身体にあふれるエネルギーを存分に燃焼させる多彩な活動が、全身を心地よく刺激して幼児の総合的な発達をはぐくみます。豊かな環境を通して意欲と集中力みなぎる身体を育て、子どもの主体性を引き出します。

ことば

「ことば」こそ、人間性の基盤です。古今の名詩やことわざ、漢詩さえも楽しく暗唱しています。先人から引き継がれた日本語の持つ一級のリズムや響きを楽しみながら、五感全てを使って吸収していく。「意味がわかる」ためでなく、「あそび」ながら豊かな言語感覚を育てます。

リズム

音楽をはじめ絵画・文章といった多様な表現活動を積み重ねています。発声や合唱の経験は、狭義の音楽活動にとどめるものではなく、子どもどうしの共同愛や他者とのコミュニケーションを培うもの。全ての活動が心地よい生活リズムを織りなし、幼児の身体の深部に元気や躍動感をはぐくみます。

PLUS ONE POINT +1

非認知能力をはぐくむ

非認知能力とは、学力テストやIQなどでは計れない人間の能力のことです。目に見えない感情や心の動きといったような、数値化しにくい分野の能力です。最新の研究では、幼児期における非認知能力の発達が、大人になってからの人生（健康度、学歴、経済力、幸福感など）に深く影響することがわかってきています。非認知能力すなわち意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、自制心、創造性、コミュニケーション能力等、これらはまさに総幼研の活動ではぐくまれる人間性の土台、深広の根っこです。日々体育ローテーション、言語日課、音楽日課といった園生活をくり返すことで「いつのまにか知らぬ間に」身につけていくのです。